

J.E.K.S. The Japan Electronic Keyboard Society

# 日本電子キーボード学会

## 第2回全国大会

### 要項

主 催：日本電子キーボード学会第2回全国大会実行委員

と き：2006年10月28日(土) 10:30~18:00

と ころ：国立音楽大学（東京都立川市柏町5-5-1）

## 目 次

ごあいさつ 吉田泰輔 (日本電子キーボード学会代表幹事) . . . . .	1
プログラム . . . . .	2
研究発表のプログラム . . . . .	3
基調講演 「電子キーボードの未来を考える」 和智正忠 (東京医科歯科大学大学院) . . . . .	4
研究発表	
A M.L.教育に関するもの	
① 保育所保育士・幼稚園教諭養成課程におけるMLによる初見奏の指導 . . . . .	田中英夫 6
② ML授業にMIDI演奏データを活用する試み～ネットワークとFDを利用する～ . . . . .	小倉隆一郎 7
③ 「キーボードハーモニー」におけるコンピュータの活用 . . . . .	脇山 純 8
B 生涯教育に関するもの	
① 生涯教育のキーボード指導 . . . . .	影山建樹 9
② 60歳から始めるキーボード…生涯教育現場からの提言 . . . . .	小沢真弓 10
③ 電子キーボードの活用による音楽の学習の可能性 . . . . .	仁田悦朗 11
C アンサンブルに関するもの	
① 電子オルガンによる協奏曲のピアノ教育における有効性 . . . . .	海津幸子・藤井祥子 12
② ハイブリッド・オーケストラについての一考察～オペラにおける現状と課題～ . . . . .	阿方 俊 13
③ 東邦音楽大学における電子オルガン伴奏によるピアノコンチェルト ～2・3台の電子オルガンを使つての試み～ . . . . .	桑原 徹 14
D Musical/Operaに関するもの	
① 250回を迎えたシリーズコンサート「公園通りの一夜」経過報告 . . . . .	川村敬一 15
② くらしき作陽大学における電子オルガンによるミュージカルの試み . . . . .	赤松英彦 16
③ 電子オルガンによる新作ミュージカル～2台の電子オルガンを使うメリット～ . . . . .	西山淑子 17
E 創作に関するもの	
① 2台の電子オルガンによるR. Straussのオーケストラリート . . . . .	山咲史枝 18
② 電子オルガンのための作品について～自作自演から見えてくるもの～ . . . . .	福地奈津子 19
③ 「バベルの塔—電子オルガンのための」を作曲して—電子オルガンらしさとは . . . . .	三宅康弘 20
F 歴史・その他に関するもの	
① 電子オルガンの歴史的考察(2)～音と音楽と周囲との関わり～ . . . . .	金銅英二 21
② マルチトラックアサインの実演及びその有用性について . . . . .	小熊達弥 22
③ 電子オルガン音楽の社会認知に必要なこと～コンサート活動を通しての可能性と課題～ . . . . .	安井正規 23
G 将来性に関するもの	
① 電子オーケストラの使命～電子オルガンでオーケストラ作品を演奏する意味～ . . . . .	野口剛夫 24
② 多様化時代と電子オルガン指導 ～ドリマトーン、アトリエ、エレクトーン共存の試み～ . . . . .	前田栄子 25
③ 芸術創造の立場から見た電子オルガンの将来性 . . . . .	中島洋一 26
H 教育に関するもの	
① 音楽教育と電子キーボードの音色について . . . . .	初山正博 27
② 奏者の身体性を反映した電子オルガンアレンジ ～若い演奏者の息遣いをかき消さないために～ . . . . .	森松慶子 28
電子キーボード・デモンストレーション “マルチメディア芸術素材としてのキーボード演奏について” ～キーボード演奏と電子技術の新たな関係性の模索～ . . . . .	今井慎太郎 29

### 賛助会員

(財) ローランド芸術文化振興財団  
ヤマハ 株式会社  
株式会社 河合楽器製作所  
株式会社 トーオン  
鈴木楽器販売 株式会社  
株式会社 トーオー楽器  
株式会社 ヤマハ・ミュージック西東京

### 日本電子キーボード学会第2回全国大会 「要 項」

発 行 日 2006年10月28日  
編集発行人 日本電子キーボード学会  
〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-16-6  
昭和音楽芸術学院 阿方気付  
Tel. 044-953-1230 Fax. 044-953-6580  
E-mail: [ieks@snow.ocn.ne.jp](mailto:ieks@snow.ocn.ne.jp)  
[http:// http://www18.ocn.ne.jp/~ieks/](http://http://www18.ocn.ne.jp/~ieks/)  
印 刷 所 イゲタ印刷株式会社  
〒270-1168 千葉県我孫子市根戸 1216  
Tel. 04-7185-0471

## 会場別スケジュール

10:00	受 付 6号館(教育センター)ロビー			
	6号館(教育センター)大講義室			
10:30	あいさつ 高野紀子(国立音楽大学学長) 吉田泰輔(日本電子キーボード学会代表幹事)			
10:45	基調講演 「電子キーボードの未来を考える」 和智正忠(東京医科歯科大学大学院)			
11:15	総 会			
12:00	昼 食 1号館学生食堂			
	Room - 1 (2号館ML教室) 司会 仁田悦朗	Room - 2 (6号館302号室) 司会 柴田 薫	Room - 3 (6号館304号室) 司会 野口剛夫	Room - 4 (6号館大講義室) 司会 安藤恭子
13:00	A - ① M.L.教育 田中英夫	C - ① アンサンブル 海津幸子・藤井祥子	E - ① 創作 山咲史枝	H - ① 教育 初山正博
13:30	A - ② M.L.教育 小倉隆一郎	C - ② アンサンブル 阿方 俊	E - ② 創作 福地奈津子	H - ② 教育 森松慶子
14:00	A - ③ M.L.教育 脇山 純	C - ③ アンサンブル 桑原 巖	F - ① 歴史・その他 金銅英二	E - ③ 創作 三宅康弘
14:30	休 憩			
	Room - 1 (2号館ML教室) 司会 小倉隆一郎	Room - 2 (6号館302号室) 司会 海津幸子	Room - 3 (6号館304号室) 司会 柴田 薫	Room - 4 (6号館大講義室) 司会 森松慶子
15:00	B - ① 生涯教育 影山建樹	D - ① Musical/Opera 川村敬一	G - ① 将来性 野口剛夫	F - ② 歴史・その他 小熊達弥
15:30	B - ② 生涯教育 小沢真弓	D - ② Musical/Opera 赤松英彦	G - ② 将来性 前田栄子	F - ③ 歴史・その他 安井正規
16:00	B - ③ 生涯教育 仁田悦朗	D - ③ Musical/Opera 西山淑子	/	G - ③ 将来性 中島洋一
16:30	休 憩			
	6号館 AV センタースタジオ			
17:00	電子キーボード・デモンストレーション “マルチメディア芸術素材としてのキーボード演奏について” ～キーボード演奏と電子技術の新たな関係性の模索～ 今井慎太郎(国立音楽大学講師)・学生有志			
18:00	1号館学生食堂 懇 親 会			

## ごあいさつ

吉田 泰輔（日本電子キーボード学会代表幹事）



日本電子キーボード学会の第二回全国大会を開催する運びとなりました。かねてお知らせしておいた通り、今回は国立音楽大学に会場を設定させていただきました。発表者あるいは会員等、大会に参加される方々には、いささか足の便の悪いところですが、多彩な研究発表と参加の方々の熱意とが、十二分にそれを補ってくださるものと信じております。

この学会も、正式の立ち上げから二年目を迎え、基礎固めの山場に入りました。会員の数も漸増はしているものの、学会として自立した活動を行い、世の中に広く認知されるためには、まだ到底充分とはいえません。また、学会の今後の展望をより明るいものとするためには、研究の質量両面からの向上を常に計らなければなりません。現在の規模の小ささから生ずる限界を乗り越えるのは簡単なことではありません。音楽文化、特にこの学会が扱う分野を取り巻く環境を併せ考えますと、私たちの研究活動の持つ社会的意義は決して小さいものではないと確信すると同時に、またその活動の継続の厳しさにも思いを致さざるをえません。役員はもとより、会員諸氏におかれましても、これまで以上の活動と学会への支援が求められるゆえんです。

最後に、今回の全国大会が、今後の分野の発展の視界を広げる機会となることを祈念いたします。

平成 18 年 10 月 28 日

# プログラム

10月28日(土)

09:30 受付

10:30 開会

あいさつ 高野紀子(国立音楽大学学長) 吉田泰輔(日本電子キーボード学会代表幹事)

10:45 基調講演「電子キーボードの未来を考える」 和智正忠(東京医科歯科大学大学院)

11:15 総会

1. 開会の辞
2. 議長選出
3. 報告 1)2005年度下半期～2006年度上半期活動報告  
2)2006年度上半期会計報告・同監査報告  
3)その他
4. 協議 1)2006～2007年度役員体制について  
2)日本電子キーボード学会会則(案)について  
3)編集委員会規程(案)について  
4)投稿規程(案)について  
5)2007年度事業計画(案)について  
6)第3回全国大会開催候補地について  
7)その他
5. 閉会の辞

13:00 研究発表

- A M.L.教育に関するもの／Room - 1  
田中英夫 小倉隆一郎 脇山 純
- B 生涯教育に関するもの／Room - 1  
影山建樹 小沢真弓 仁田悦朗
- C アンサンブルに関するもの／Room - 2  
海津幸子・藤井祥子 阿方 俊 桑原 巖
- D Musical/Operaに関するもの／Room - 2  
川村敬一 赤松英彦 西山淑子
- E 創作に関するもの／Room - 3／Room - 4  
山咲史枝 福地奈津子 三宅康弘
- F 歴史・その他に関するもの／Room - 3／Room - 4  
金銅英二 小熊達弥 安井正規
- G 将来性に関するもの／Room - 3／Room - 4  
野口剛夫 前田栄子 中島洋一
- H 教育に関するもの／Room - 4  
初山正博 森松慶子

17:00 電子キーボード・デモンストレーション 今井慎太郎(国立音楽大学)

18:00 懇親会

## 研究発表のプログラム

### 研究発表 - I 13:00~14:30

#### Room - 1(2号館 ML 教室) 司会: 仁田悦朗

- M.L..教育 ① 田中英夫: 保育所保育士・幼稚園教諭養成課程におけるMLによる初見奏の指導  
M.L..教育 ② 小倉隆一郎: ML 授業に MIDI 演奏データを活用する試み~ネットワークとFDを利用する~  
M.L..教育 ③ 脇山 純: 「キーボードハーモニー」におけるコンピュータの活用

#### Room - 2(6号館 302 号室) 司会: 柴田 薫

- アンサンブル ① 海津・藤井: 電子オルガンによる協奏曲のピアノ教育における有効性  
アンサンブル ② 阿方 俊: ハイブリッド・オーケストラについての一考察~オペラにおける現状と課題を探る~  
アンサンブル ③ 桑原 巖: 東邦音楽大学における電子オルガン伴奏によるピアノコンチェルト  
~2・3台の電子オルガンを使っの試み~

#### Room - 3(6号館 304 号室) 司会: 野口剛夫

- 創 作 ① 山咲史枝: 2台の電子オルガンによる R. Strauss のオーケストラリート  
創 作 ② 福地奈津子: 電子オルガンのための作品について~自作自演から見えてくるもの~  
歴史・その他 ① 金銅英二: 電子オルガンの歴史的考察(2)~音と音楽と周囲との関わり~

#### Room - 4(6号館大講義室) 司会: 安藤恭子

- 教 育 ① 初山正博: 音楽教育と電子キーボードの音色について  
教 育 ② 森松慶子: 奏者の身体性を反映した電子オルガンアレンジ~幼い奏者の息遣いをかき消さないために~  
創 作 ③ 三宅康弘: 「バベルの塔—電子オルガンのための」を作曲して—電子オルガンらしさとは

### 研究発表 - II 15:00~16:00

#### Room - 1(2号館 ML 教室) 司会: 小倉隆一郎

- 生涯教育 ① 影山建樹: 生涯教育のキーボード指導  
生涯教育 ② 小沢真弓: 60歳から始めるキーボード...生涯教育現場からの提言  
生涯教育 ③ 仁田悦朗: 電子キーボードの活用による音楽の学習の可能性

#### Room - 2(6号館 302 号室) 司会: 海津幸子

- Musical/Opera ① 川村敬一: 250回を迎えたシリーズコンサート「公園通りの一夜」経過報告  
Musical/Opera ② 赤松英彦: 暮らしき作陽大学における電子オルガンによるミュージカルの試み  
Musical/Opera ③ 西山淑子: 電子オルガンによる新作ミュージカル~2台の電子オルガンを使うメリット~

#### Room - 3(6号館 304 号室) 司会: 柴田 薫

- 将 来 性 ① 野口剛夫: 電子オーケストラの使命~電子オルガンでオーケストラ作品を演奏する意味~  
将 来 性 ② 前田栄子: 多様化時代と電子オルガン指導~ドリマトーン、アトリエ、エレクトーン共存の試み~

#### Room - 4(6号館大講義室) 司会: 森松慶子

- 歴史・その他 ② 小熊達弥: マルチトラックアサインの実演及びその有用性について  
歴史・その他 ③ 安井正規: 電子オルガン音楽の社会認知に必要なこと  
~コンサート活動を通しての可能性と課題~  
将 来 性 ③ 中島洋一: 芸術創造の立場から見た電子オルガンの将来性

## 「電子キーボードの未来を考える」

和智 正忠(東京医科歯科大学大学院包括病理学分野)

### 1. 序

電子キーボードは文字通り、電子技術の発達と共に進化を遂げてきた。しかし、音楽の中における楽器としての独自のポジショニングは必ずしも確定していないとの意見が多く聞かれる。この問題の追及には非常な困難を伴うと想定されるが、本学会の活動趣旨に合うテーマと考えられるので、最初のステップとしてその整理を試みたい。

### 2. ハードウェアとしての進化の足跡

先ず、この楽器が何を指してどのようにして今日に至ったのかを概観することにより、この楽器の一般的特性に対する理解を共有したい。

- A. 10 世紀:教会用オルガン(鍵盤楽器のルーツ:気柱共鳴による発音)
- B. 19 世紀:リードオルガン
- C. 1906:テルハーモニウム(発電機+電話)
- D. 1934:トーンホイールオルガン(電磁的発音+増幅器+スピーカ)
- E1. 1939:アナログ式電子オルガン(電子回路による発音、音色生成)
- E2. 1960:アナログ式シンセサイザー
- F1. 1971:デジタル式電子オルガン
- F2. 1980:デジタル式ポータブルキーボード
- F3. 1983:デジタル式シンセサイザー
- F4. 1983:PCM 式電子ピアノ

以上のような変遷はテクノロジーを活用して既存楽器の模倣と便利さを追求してきた足跡と言え、それが今日の電子キーボードの特性に反映されたと考えられる。その特性としては以下のような列挙が可能であろう。

長所:

- 1. 演奏のバリエーションが低い
- 2. いろいろな音色を出せる
- 3. 機能拡張が容易(PA, コンピュータおよびネットワーク機能との協調)
- 4. ピッチが安定していて、必要なら変更も可能
- 5. 持ち運びやメンテナンスが容易
- 6. 大量生産による低価格

短所:

- 1. リアルタイムでの固有の音色表現が不得手
- 2. 音響特性がスピーカに依存
- 3. 大量生産品のためレプリカの共通性
- 4. 電池を含む電源が必要
- 5. 長年に渡るサポートの限界のリスク(ハイテク品に見られる)

これらを端的に纏めると、長所として誰でも容易に便利に使える多彩な楽器、短所として深みのある個性的表現をリアルタイム演奏で発揮することは苦手ということになるだろうか。要はこの楽器の持つ長短をよく吟味して、それを生かすようなアプリケーションの開発を進めることが大切だろう。

### 3. 楽器と音の構造

電子楽器の音はスピーカから出るからどうも好きになれないという声が、特にクラシック音楽の関係者から聞かれる。このような「感覚」は一面の本質を突いていると思われ、電子楽器の関係者としては無視できない事柄である。同様な声が、レコードの世界では蓄音機→電気蓄音機(SP 盤)→LP 盤→CD 盤の世代交代で、またオーディオアンプの世界では三極真空管アンプ→五極真空管アンプ→トランジスタアンプ→デジタルアンプの世代交代の時に聞かれた。これらから類推できる要素をピックアップしてみる。さらにスピーカとホール音響の関係について、アコースティック楽器によるコンサートと対比させて検証し、問題がどこにあるかを抽出し、対処の方策と限界を考える。

電子オルガンとアコースティック楽器の共演が試みられているが、以上の観点に照らすと、これは以下の相乗効果を引き出す非常に利に適った組み合わせと言える：

#### 1) 電子オルガンの採用

少人数で多くのパートと多彩な音色を受け持てる利便性を活用

#### 2) 少数の弦楽器や管楽器の追加

濃密な演奏表現力を付与し、かつスピーカの弱点をカバー

### 4. 人間と音楽と楽器

人間と音楽との関わりについて振り返り、その中での楽器の存在意義について考える。Bittman らによる健康増進を目的とした事例はその流れの一環であり、このようなアプリケーション開発が電子キーボードの新たな活用のために重要である。このような活動では見知らぬ人同士が瞬時に打ち解けコミュニティを形成する様子も観察された。電子キーボードはこれにもっとも適った特性を備えている。

### 5. これからの可能性

健康増進分野に加えてもう一つのアイデアを上げるとすれば、それはコミュニケーションの補完である。例えば email やブログはコミュニケーションや自己表現のために画期的な利便性を提供したが、一方では感情などの非言語的情報が伝わりにくく、心理的なギャップを招来する一因となっている。電子キーボードのバリアフリーアプリケーションを開発することによって、音楽をすること(Music-making)が人々の生活にとって言葉のように身近なコミュニケーションツールになれば、人々の音楽活動を通じた相互理解を伴う社会形成のための架け橋になるかもしれない。このようなコンセプトに沿ったアプリケーションとそれを支えるハードウェアの開発を当学会の皆様に提言させていただきたい。

#### 講演者略歴

昭和43年3月 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了

昭和48年2月 日本楽器製造(現ヤマハ)株式会社入社以来、

- ・コンピュータによる楽音の音色研究
- ・電子楽器の研究開発および設計
- ・電子楽器および音響機器事業の経営
- ・全社研究開発部門の運営  
に従事。

平成15年6月 音楽による健康増進に関する研究を開始するため、常務取締役を退任。

平成15年4月 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科博士課程に入学、現在にいたる。

## 保育所保育士・幼稚園教諭養成課程における ML による初見奏の指導

田中 英夫 (立正大学)

ML という集団教育システムに数多くの利点があることは周知の事実であろう。当初はピアノ指導の集団化に違和感を覚えながらも、1人1台の電子ピアノを一斉に指導できることと外部に音を漏らさないという点だけをとってみても、個人指導や一般の教室ではかなわなかったことであり、やがて ML は単なる集団化だけではないことに気づくことになるのである。

ML による指導の領域は広い。まず通常のピアノ演奏はもちろんだが、初学者にはたしかにピアノの代用にはなる。音楽理論や鍵盤和声、伴奏づけにはとくに効果を発揮する。初見奏はどうであろうか。

初めての楽譜を見てただちに演奏することを初見奏とすると、それはあえて指導の機会を設定しなくても個人的に数多くの楽譜に接することによって自然に獲得できる能力のようにも思える。しかし周到に準備された教材によって段階的かつ体系的な指導が根気強くなされた場合、読譜力の向上だけではない実践的な楽譜の読み方についても学生は体得することができる。目と手の一瞬の早わざは、慣れだけの問題ではない。

保育所や幼稚園で子どもと関わる者にとって、初見奏の必要性はどこにあるのであろうか。生活習慣、季節、行事に関連する子どもの歌との日常的な関わりから、絶えず新しい楽譜に取りかかる必要があるというのはもともとであろう。急に弾かなければならない状況や、仕事が忙しいので練習時間を節約したいという切実な理由もあらずける。こうした場所への就職を希望する学生に対して、つまり保育所保育士や幼稚園教諭を旨とする学生を指導する立場にある者として、初見奏の指導の必要性は、じつはまず就職試験対策にあった。とくに多くの私立の幼稚園や保育所では、面接とピアノが最も重要な採用試験(学生にとっては就職試験)の課題であることは間違いない。しかもそのピアノの試験の課題はたいてい自由曲か課題曲であり、課題曲は事実上の初見奏であることが多いのである。

本口頭発表では、こうした現実的な初見奏の指導の必要性を発端とする立正大学社会福祉学部人間福祉学科における1981(昭和56)年9月導入以来のMLによる初見奏の指導について事例報告をおこなう。

1. 初見奏
2. 設備
3. 状況
4. 課題
5. 実践
6. 展望

という構成である。

初見奏の指導については、ML のもつ機能のごく一部があれば事足りる。すなわち外部に音を漏らさずに一斉指導ができるという点である。加えて、じつは発表者は、マイクやモニターをあまり使用せずなるべく巡回することを心がけている。キーボード自体にも多機能や付加価値をあまり望んではいない。ML の恩恵に浴しながらも、反面、その利便性や効率性には意外な教育上の落とし穴が潜んでいるかもしれないことも見落としてはならない点であろう。

## ML 授業に MIDI 演奏データを活用する試み — ネットワークと FD を利用する —

小倉 隆一郎(文教大学)

ML の授業におけるピアノの指導をサポートすることをねらいとして、次の 3 つのメディア、すなわち 1.ML キーボード・クラビノーヴァ用のフロッピーディスク(以降 FD と略)、2.学内および学外のネットワークを利用したホームページ、3.携帯電話の音楽配信サービスを通して論者が作った演奏データを配信するシステムを考案し、試行した。

### 1.なぜ演奏データを活用するのか

本学教育学部心理教育課程における音楽ピアノ関連科目は「音楽」「器楽表現基礎」「器楽伴奏法」の三種であり、すべて ML による集団授業を実施している。「音楽」の半期のみが必修、その他は選択授業である。「音楽」の授業を実施する中で、いくつかの問題点が現出した。一つは受講者数が多く、ML の学生用キーボードの台数(42 台)を上回るクラスがあったこと。二つ目は、ピアノの学習経験がないか幼年期に短期間習ったのみといった初心者が履修者の約 1/4 を占める点である。初心者は新しい曲を練習する際、楽譜から曲のイメージを読み取ることが難しいため、譜読みのサポートの一つとして曲の全部または一部を模範演奏して聞かせることが効果的である。ML システムによる初心者の指導を円滑に行うための一つの工夫として演奏データの活用を考えた。

### 2.演奏データの製作・設置に関して

学生が演奏データを利用しやすい環境と、それらに対応できるメディアとして上記の 3 つを採用し、それらに共通の演奏ファイル形式として MIDI を使用した。教材は、現在本学で使用している「大学ピアノ教本」(教育芸術社)の No.1～104 であり、ML 教室の親機で論者がリアルタイム録音したデータを MIDI 形式で保存する。すべての録音が終了した後、104 曲のデータをコンピュータにコピーして、以下に述べる 3 種メディアの作成に利用した。

### 3.アンケート調査の概要

学生が模範演奏のデータを利用した状況を把握する目的でアンケートを実施した。文教大学教育学部心理教育課程 2 年次生の内、論者の講義を受講している学生 90 名を対象とし、85 名から回答を得た。

その結果、FD がもっとも頻繁に利用されたが、FD はクラビノーヴァに挿入して再生ボタンを押すだけという簡便さが多くの利用を促した一因と考えられる。使用に際し、FD に頼ってしまい楽譜が読めなくなってしまう等の問題点がみられたが、一方、授業レッスンにおいて正しい譜読みや適切なリズムとテンポで弾けるようになった等、MIDI 演奏データを活用した効果の一部が感得できた。ホームページと携帯電話を合わせると 2 割強の学習者が活用していることが明らかになった。しかし、携帯を利用しなかった理由として「携帯の操作が面倒」と答えた学生が 31.4%で、携帯世代と言われながら、メールと電話以外は苦手といった実態が垣間見られた。

今回の調査では、論者が新任であり試用期間が短かったため、アンケートには演奏データを活用した効果についての質問項目を含めなかった。次回は、メディアを利用した演奏データ活用の具体的な効果の検証を行う予定である。そして、論者にとって急務であるが、上述の問題点やその他の意見を精査しながら ML 授業の改善を進めたい。

## 「キーボードハーモニー」におけるコンピュータの活用

脇山 純(平成音楽大学)

「キーボードハーモニー」の授業におけるコンピュータの活用、利用法を述べてみたい。ML教室内にある電子楽器、電子機器とコンピュータとの相性の良さを最大限に活用し学生の能力向上をめざしている。続々と出てくる音楽ソフトの機能の利用で勢いのいい授業が実現する。

対象: 必修科目としての「キーボードハーモニー」なので鍵盤楽器を得意としていない学生も受講している。指と目が器用に連動して音が出る状態は目標ではなく、重要なのは「サウンド」であり、頭の中にある「音」を表現する為に指が反応する状態をめざす。

テクニックで弾かない授業: 伝統的な感覚からは、機能を無視した現在の音楽に染まった学生の耳に機能重視の音楽を感じてもらい更に、耳とセンスを鍛える。

ところで、指が十分に動かない状態で鍵盤を使って和声の表現はどうするか？

コンピュータを使うと、解決できることもある。

コンピュータは「道具」なので、ソフトウェアが何であれ使い方次第でいくらでも効果が出る。工夫すれば、基本的機能以外の使い方を発見することもある。

ここで重要な要素の一つに「時間」がある。高性能のコンピュータとソフトを使おうと、操作に時間がかかると、授業の流れが阻害される。平成音楽大学では興味があれば、一般の学生もコンピュータミュージック、ノーテーションの授業を受講でき、この分野を更に深く勉強することも出来る。

具体的な例を示して行きたい。

### ノーテーションソフト”Sibelius”とシーケンスソフト”LOGIC”

「楽譜」は重要か？

記録としての重要さは言うまでもないが、目的によっては「楽譜」がない、「楽譜」に頼らない方が良い時もある。音の出る楽譜、記譜上正しい楽譜が書ける、直感的に使える”Sibelius”を利用すると

- ①音の出る楽譜として、スクロール機能のおかげで目と耳を連動
- ②音は出ても音符は見えない不思議な楽譜
- ③リアルタイムの演奏を楽譜に
- ④楽譜をメールで送るなどのことが可能になる。

弾いたままを録音再現、編集出来る多機能な”LOGIC”を利用すると ①演奏を客観的に見る(数値化されたデータで確認) ②ボーカルやギターの演奏も録音 ③指一本で機能を理解した和声の再生が出来るようになる

様々な音楽ソフトの利用(キーボードにこれらの機能が付いていることも多いが)

- ①自動伴奏: 一人で幅広い音楽スタイルを楽しめる
- ②コード判定: 音としては把握しても、コードネームが分からない時の補助
- ③音程判定: 歌、楽器の演奏のピッチのずれを判断
- ④演奏のミス発見: 元になる楽譜の正確な再生
- ⑤楽譜のスキャン: 入力の手間をかけず楽譜が出来る
- ⑥耳コピの確認: オーディの中からコードを分析

コンピュータの授業での音楽以外の利用についても述べてみたい。

音楽用のソフトウェア以外にも円滑な授業に役立つソフトウェアが数多くある。

メール、インターネットなどを利用することにより、学生のリテラシーを向上するのに役立つことができる。

最後に今後の課題についても考えてみたい。

- ①技術の進化、変化への対応
- ②本物の「音」を体内に持つ必要性
- ③墨絵「モノクロ」の魅力
- ④電子オルガンの利用、導入

コンピュータを活用することで、限られた時間に、学生の音楽的センスを理論と結びつける能力を向上させることを可能にしたい。

## 生涯教育のキーボード使用

影山 建樹(清見潟大学塾)

本発表は、静岡県の旧清水市が設定した公設民営の生涯学習機関、清見潟大学塾における電子キーボード指導の実践報告である。概要は以下の通り。

### 1 指導環境

### 2 受講生の最初の願い(受講理由)の例

受講理由は、(クラシック)音楽を勉強したいという《教養型》、若い自分に触ったことのある鍵盤楽器に再挑戦したいという《技能型》、夫のハーモニカや孫の歌の伴奏をしたいという《家庭型》、老人クラブで歌謡曲や軍歌を弾いて聞かせてあげたいという《福祉奉仕型》、事故による手や指の障害の克服のためにという《リハビリ型》、夫に先立たれて生きる望みが失われそうだからという《精神安定型》等々、多岐にわたる。

### 3 指導(経営)方針

講師は教師ではなく、受講者の望みが達成できるように援助するものであり、幼年者に対する音楽指導とは異なつて基礎をしっかりと習得することに必ずしもこだわらない。講座に通うこと自体が楽しみとなるように配慮して弾きたい曲に取り組み、誉め、励まし、失敗も受け入れる。なぜなら、叱る必要がないからである。練習不足や楽譜通りでない演奏であっても、一旦は受容する。曲の表現に最も必要な技能をつきつきりでトレーニングし、多くは要求しない。半年に一度は仲間内の発表会を持って各々自分なりの目標を持てるようにする。キーボードは最初は講師が用意するが、多くの場合一年以内に自分の楽器を持つようになる。また、受講者は人生の先輩であり、キーボード以外のことに関しては自分より豊かな経験を持っているので、尊敬の念を持って接する。そして礼はしっかりと受けてしっかり返す。

### 4 中途退会の理由

キーボードで音楽をするということ、パソコンによる音楽制作であるイメージしていた、受講者自身が病気で通えなくなった、家族の介護をすることになった、配偶者と死別した、等。

### 5 最初の指導

### 6 指導上の注意事項

### 7 個人の例

### 8 キーボードテキスト(講師製作)の構成

テキストは「入門編」と「応用編」から成る。前者は入門時に渡してキーボードに対する理解を深め、初歩練習をするためのものであり、後者は毎年一冊ずつ提供する応用曲集。これまでに応用曲集を十冊出している。

### 9 講座の様子

受講生の演奏風景を DVD でご紹介する。

### 10 電子キーボードメーカーへの注文

生涯教育、それもお年寄りを意識したキーボードの製作をお願いしたい。音が美しく、操作が容易で、故障が少なく、耐用年数が長く、さらには軽量なものが望ましい。また、プリセットされているオートリズムなども、高齢者が弾きたい音楽にマッチするものがもっと多く採用されていれば良いのにと感ずる。

## 60 歳から始めるキーボード……生涯教育現場からの提言

小沢 真弓(市川市社会教育指導員)

わが国では来年度(2007年)からいわゆる団塊の世代が悠々自適生活に入り、以後増大していくであろうといわれている。60歳の人の平均余命は約20年。何かを習得し始めるのに十分な時間がある。私の所属する公民館でも利用者の多くは学習意欲のある高齢の方である。しかしこの20年は幼少期の人間が学び始める20年とは大きく違うはずだ。現に中高年になってから楽器を習い始める人も多いが、完成度を高く求めればその道は長く険しいことに気づき、挫折していくことも多い。

この点、電子キーボードを選択することは、個人の経済状態、住宅事情により諦めざるを得なかった楽器の代わりとしてはもちろん、現実には演奏不可能な憧れの楽器の音で演奏することによりオーケストラなどの興味へと発展させる可能性も広がり、音楽を求めていた人々に潤いを与えることになるのではないかと考えられる。指の力も練習量も比較的少なくすみ、操作方法を会得することによって脳も活性化させることができる。長い人生にはそれなりの音楽的な経験があるわけで、お気に入りの曲を自ら選んだ音色や自動伴奏で生き生きと演奏する姿に出会うたび、個々の音楽への造詣の深さに感動させられる。このように人生経験が豊かなことも電子キーボード演奏に効果があり、生涯教育に電子キーボードは最適な楽器なのである。

一方、私はこれまで『ピアノ』を指導している」と思っていたが、一部の『電子キーボードを持っている生徒』に『ピアノの弾き方』を強要していたのではないかと自問するようになってきた。機能が全く違うのに同じ指導法でよいはずがない。しかも、現実には個人やグループで中高年をレッスンしてみると、子どもや学生の指導とは質の違う様々な問題が浮かんてくる。ここではポータブルキーボードのグループレッスン実施例と以下に挙げる2つの視点をもとに、受講者の平均年齢であった「60歳」からの初心者指導を考えてみたい。そして電子キーボードならではの利点が多々あるのに代替楽器に甘んじている現状に提言したい。

**1 楽器;** 電子オルガン以外のキーボードは大別してピアノタイプとキーボードタイプに分かれている。前者はピアノの代替としての要素が強く、鍵盤タッチは固め、外見は重厚で部屋に固定するタイプである。後者のタッチはやわらかくまた鍵盤の数やサイズが多様であり、多機能搭載の持ち運びができるタイプである。生涯教育としてキーボードを指導しようとするとき、指導者は対象になる器種と機能があまりに多すぎ呆然とする。もし、生涯学習用楽器として取り組むのであれば機能をある程度シンプルに「全国統一」することをメーカーに望みたいのである。

**2 教材;** 成人になってから鍵盤楽器を始める人は、音符よりも指番号でメロディを捉える傾向が強く、また、手の置き方・指の動かし方にも特徴がある。人間の手の神経は第1指・第2指・第3～5指の3本に分かれているようで、3・4・5は1本の神経を共有していることになりうまく動かさないのは当然なのである。力学的に指のタッチが正確でないと音の鳴らないピアノと違い、電子楽器は触れただけで音が出る。うまく指が回らず思わぬ音が出てしまって痲痺を起こしていた人もあるので、コントロールしやすい指で目指す音をすばやく弾けるように「パーソナル指番号」があっても良いのかもしれない。ピアノの初心者教本と然して変わらぬテキストでは効果的とは言えず、電子キーボードと弾く人のそれぞれの特徴に最適な教材・指導書を早急に研究すべきであると考えられる。

## 電子キーボードの活用による音楽の学習の可能性

仁田 悦朗(i-moa 音楽教育研究所)

## 1. はじめに

「生涯学習時代」における教科「音楽科」の在り方について考えるとき、電子キーボードの果たす役割はすこぶる大きいものがあると考えられる。それは電子キーボードを活用することによって音楽の学習を質的に変え得るからである。それは、①「教えられて習う」学習から「自ら探り学び取る学習」への転換であり、②「ステージに向かう音楽」から「場の音楽」へと学習観を広げていける取り組みへの転換である。

学習は本来、対象と自己との関係に気づき、個人的な意味づけしたり理解したりすることであり、それを通して自分なりの文化を身につけることである。生涯学習社会にあつては、学習に対するそうした捉えがますます重視される。生涯にわたって自己の関心事に深くかかわり、自己実現を図ることが認められる社会、それが生涯学習社会だからである。

そこでは、児童・生徒の主体的な学習活動(＝自ら音楽に働きかけ働き返される活動)を通して、音楽へのかかわり方や音楽という文化への参加の仕方を学び取り、音楽に触れ続けていこうとする力や構えの育ちが求められていると言つて良い。

そのためには音楽のよさに気づき、音や音楽に触れ、かかわり続けようとする内発的な動機に支えられた学習の仕組みこそが重要になる。

そのような「みのりある音楽の学習」の成立に貢献できることにこそ電子キーボード活用の意味がある。

## 2. 望ましい学習環境

学習者が内発的な動機をもとに、自ら問いを発し、問い続けて意欲的・主体的に学習を展開していくためには、次のような学習環境が望ましいことがこれまでの実践研究でわかってきた。

《学習環境の構成》

- ア、期待と見通しが持てる学習内容(自分にとって意味があると学習者が実感・予想できる)
- イ、学習者がイニシャチブをとりコントロールできる環境(指し手感覚を損なわず学習を展開できる)
- ウ、問い返しのある教材による題材構成(教材から問い返され、自己に問い返し常に自己評価しながら確かな学習をめざすことができる)

そうした学習環境の構成に電子楽器は有効に機能してきたのである。

## 3. 電子キーボード活用による利点

電子キーボードの諸特性は、学習者に次のようなメリットをもたらす。

- 豊富な音色群から必要とする音色を選択可能であること
- アコースティックな楽器がそれぞれに持つ固有の奏法の獲得から自由であること
- 音楽表現にかかわる情報操作が可能であること
- 他と干渉し合わず、自分の学習・表現活動に集中できること
- Plan→Do→See のサイクルを一個人内で展開できること

これらのことにより、指導者の立場からは、

- ①学習指導を「技術の指導」から「音楽への参加の呼びかけ」へと転換できる
- ②「つくる・ためす」などの創造的な学習を無理なく仕組むことができる
- ③個性を生かした「その子なりの学習」を仕組むことができる

といった「教え・伝える学習指導」から「学び取る学習指導」への転換を図ることが可能になる。

そうした転換とより望ましい学習環境の構成が相まってこそ、学習者の主体的で創造的な取り組みを促す学習指導につながると期待できるのである。

## 4. MIDI による活用の広がり

MIDI を無理なく活用することで、自立した学び手として学習者を育む環境を整えることも可能になるが、その一事例を紹介し、生涯学習社会で学習者と目される「子どもから大人」まで、万人に開かれた「音楽の学習＝参加を通して音楽文化への参加の仕方を学ぶ」の一端を覗いてみたい。

## 電子オルガンによる協奏曲のピアノ教育における有効性

海津 幸子・藤井 祥子 (サチコ・ミュージック)

電子オルガンをピアノ協奏曲等の協奏曲演奏に利用する試みはすでに数多く行われてきており、そのオーケストラの代用楽器としての可能性はもはや疑う余地がない。ここではさらにピアノ協奏曲の学習において電子オルガンを使用することの有効性を、教育的観点から検証したい。

### 1. ピアノ協奏曲学習段階におけるオーケストラパート

協奏曲は独奏パートとオーケストラパートの対話や強調によって楽曲が成立しているため、ピアノ学習者は自身が演奏する独奏パートのみならずオーケストラパートを認識し理解する必要がある。学習手段においてオーケストラパートを何らかの手段で代用し実際にアンサンブルして練習を進めるが、その手段としての(1)ピアノによる代用 (2)マイナスイオン音源の活用 (3)電子オルガンによる代用 それぞれについてそのメリットとデメリットを分析する。

### 2. 電子オルガンを用いたピアノ協奏曲教育の現場とその可能性

音楽大学等高等音楽教育機関における電子オルガンを用いた協奏曲学習の現状とその意義とともに、ピアノ学習初級段階からアンサンブル教育の一環として協奏曲学習に取り組む可能性とその位置付けを考察する。

### 3. 音楽的アプローチによる教育的効果

拍子感・和声感・ポリフォニックな耳の育成、各自のアイデンティティーによる音楽解釈と再創造力の伸長等の助力となり得る協奏曲学習のあり方と、そこでの電子オルガンの活用方法を探る。

### 4. 今後の課題とまとめ

アンサンブルとして対話と協調を实践しうる音楽解釈と表現力をもった電子オルガン奏者の育成、教材や楽曲も含む環境の整備等課題も多いが、電子オルガンによるピアノ協奏曲の普及はピアノ教育及び電子オルガン教育の双方に有益なものであると確信している。

ハイブリッド・オーケストラについての一考察  
～オペラにおける現状と課題を探る～

阿方 俊(昭和音楽大学)

ハイブリッド・オーケストラということばを聞く機会が多くなってきており、本学会「学会誌」や「ニューズレター」の記事でも見受けられる。ハイブリッド(hybrid)のもともとの意味は、異種混合の、雑種の、ということであり、ガソリンと電気で作動するエンジンを搭載しているハイブリッド・カー、人工交配による雑種の多収稲であるハイブリッド米、楽器の分野では音の発振がアコースティックのパイプと電子発振のスピーカーが組み合わさったハイブリッド・オルガンなどが挙げられる。

ここでいうハイブリッド・オーケストラとは、アコースティック楽器と電子楽器で編成されたアンサンブルのことを指し、多くの種類があるが、オペラ関連では次のような演奏形態が代表的なものである。DVD で次のものを聴いてみる。

No.	楽器編成			主催者/曲目
	電子オルガン	アコースティック楽器	演奏者数	
1	2台	Timp.+Perc.×1	3名	首都オペラ(多摩パルテノン) ヴェルディ “オテロ”より
2	1台	St.×4	5名	東京室内歌劇場(モーツァルトサロン) ペルゴレージ “奥様女中”より
3	2台	St.×5+Cla.×1+Timp.	7名	Lip Presents Opera(こまばエミナース) プッチーニ “トスカ”より
4	3台	St.×9, El.Piano×1, Per×1	12名	音楽の虹フェスティバル(大阪国際会議場) プッチーニ “修道女アンジェリカ”より
5	6台	St.×9 + Perc.×1	15名	IMC(東京芸術劇場中ホール) ヴェルディ 運命の力“序曲”
6	1台	St.×13, Wind×17, Per×1, Piano×2	34名	オランダ国営テレビ ジョン・アダムス “ニクソン in チャイナ”

これらの演奏効果について、上記 No.4 の主催者の一人でこのオペラ公演を聴いたイタリア・ヴェルディ音楽院の M. アッパード院長の、“この響きであればオペラに最も保守的なイタリア人でも容認するであろう。違和感はない”という感想に代表されるように電子音とアコースティック音に新しい可能性を認める意見が多い。同時に、No.4 を指揮した E. マッツォーラは No.2 のビデオをみて、“弦楽器にコントラバスを加えるべきであった”、また No.5 を指揮した菊池彦典は、“オーケストラならではのズシーンとくるエネルギーにひとつの問題を感じる”と楽器や音響に関する指摘もある。

今後の研究課題については次のようなものが挙げられる。

1. ハイブリッド・オーケストラ; 定義と分類
2. 奏者/指揮者; オーケストラのサウンドを脱した独自のサウンドの追求およびハイブリッド・オーケストラとしての演奏法研究(含、スコアリーディング奏法)
3. アコースティック楽器奏者; 電子オルガンとのアンサンブル法
4. 音響学的研究; 各楽器間の音量・バランス、ピッチ、倍音の関係
5. 楽器およびスピーカー; それぞれの配置とPA(含、オーケストラ・ピット)

ハイブリッド・オーケストラはオペラだけでなく、ピアノ協奏曲などでも応用されつつあり、今後、音楽の広い分野における新しい演奏形態の創造として音楽文化の普及に寄与できるものと考えられる。それらは1990年ごろからはじまり、評価されつつあるもののその研究はまだその端緒にいたるところである。今後、これらの実践に対する裏づけとしての研究が一層重要になってくる。

## 研究発表C-③

### 東邦音楽大学における電子オルガン伴奏によるピアノコンチェルト ～2・3台の電子オルガンを使っの試み～

桑原 巖(東邦音楽大学)

#### いままでの経緯

平成9年度より東邦音楽学校として「舞台芸術演奏科」として電子オルガンのコースが開講される。  
授業内容は電子オルガン奏者、作曲、指揮、音楽歴史、声楽の講師が担当する。  
電子オルガンアンサンブルでのスコアリーディング演奏の基礎技術を徹底する。  
平成14年度卒業生を最後に一旦休講

平成15年より東邦音楽短期大学、東邦音楽大学在学学生より選抜で3人の電子オルガンアンサンブル「キャトルダック」結成  
ピアノ科、声楽科の学生をソリストとしてピアノ協奏曲やオペラの演奏会を企画。  
特に付属高校の協力を得、父母対象のコンサートや文化祭に出演。  
平成17年よりメンバーを一新し「con calore」結成、エレクトーンシティ渋谷を中心に活動を広げる。  
短期大学に於いて電子オルガンアンサンブルの演習授業開始。

#### 現状

電子オルガンを使っの協奏曲やオペラがまだまだ大学に於いて正式には認知されていない。  
少数ではあるが、応援していただける先生と企画をして自主的に演奏会をしている。  
奏者が演奏技術や音楽力をレベルアップ。  
短大の授業は2年間の1クールが今年度で終わる。

#### これからの展望

短大での電子オルガンアンサンブルの履修生はピアノ科の学生が中心。  
電子オルガンにまだ慣れていない学生が多いので、比較的容易な楽曲を選び、スコアリーディング演奏意識の向上をさらに進める。  
「con calore」は東邦内の企画と東邦外の企画を積極的に広げていく。  
大学生からのソリスト希望者も増え、同時にレパートリーも増やしていく。  
全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)から派生したピアノコンチェルトの電子オルガン展開に組み込み、さらに社会に向けて活動の場をひろげていく。  
この分野は電子オルガンアンサンブルとオペラの結びつきより日が浅い。  
法人による新しい協奏曲も(特に小学生高学年～中学生向け)つくられ、魅力的な楽曲が増えてきていることにも注目していきたい。

#### 課題

- ・ 電子オルガンアンサンブル履修生の意識向上
- ・ 更なる学園内企画の充実
- ・ 「con calore」の学園内認知

## 250 回を迎えたシリーズコンサート『公園通りの一夜』経過報告

川村敬一(東京シティオペラ協会)

### 【きっかけ】

私の実兄川村江一が、エレクトーン草分けの時期の演奏家であったことから、かれこれ 40 数年前からエレクトーンに関心を持ち続けてきました。

そして、1988年の「こまばエミナース」でのリサイタルに、エレクトーンを使用することを思い立ち、三台のエレクトーンとパーカッションという組み合わせで、G.Mahler の「さすらう若人の歌」と、プッチーニのアリア数曲を歌ったのがきっかけでした。やがて、1990年10月19日に、当時渋谷公園通りに面した位置にあった、「ハーモニーパーク」において、《Opening Concert》がもたれました。以来、このたびの250回まで、「よくも続いたものよ」と、われながら若干感慨深いものがあります。

### 【変遷と発達】

やがて、「ハーモニーパーク」は現在位置の桜ヶ丘に引っ越し、名称もエレクトーンシティとなったわけです。かつての狭かった「ハーモニーパーク」でも、工夫して「Tosca」「ヘンゼルとグレーテル」「女の城」(邦人作品)「3人の国王」(本邦初演)等、いくつかのオペラを実験的に上演していましたが、現在位置に引っ越してからは、充分ではないとは言え、一応劇場機能を併せ持っていますので、「愛の妙薬」「コシ・ファン・トゥッテ」「アドリアーナ・ルクブルール」「奥様女中」「宮廷楽士長」などなど、積極的にオペラを上演してきました。やがて、名称くらいきちんと名乗りたいという声に押され、「東京シティオペラ協会」を名乗り、銀座ヤマハホールにおいて、1994年3月18・19日、「Madamma Butterfly」3回公演を持って、「旗揚げ公演」とすることができました。記録がはっきりしないのですが何時の頃からか、オペラ上演は「公園通りの一夜」のカウントからはずすこととしましたので、以来年2回から3回のペースで上演しているオペラをもカウントに入れると、「公園通りの一夜」は、270回前後になるかと思われるのです。

### 【成果は何か】

「公園通りの一夜」の初期の頃は、電子楽器を伴奏にすることには、一般的には大変抵抗があり、出演交渉をしても、「馬鹿にするな！」とばかりに、電話をガチャンと切られてしまう事もしばしばでした。20年近くに及ぶしつこいほどの活動で、いまや日本中オペラ上演に、エレクトーンのみならず電子楽器を使用することが当たり前になってきたことこそ、正に感慨深いものがあります。先般、東京二期会の事務局長にお会いした際にも、「エレクトーンでやればどんなに楽になるか知れないのに、主に大学の先生をしている理事の方々から、強い反対があるので. . . . .」と嘆きすらお聞きしたほどです。

こうしてきわめて経済的に、小さい空間でもグランドオペラが上演可能になりましたので、多くの声楽家たちに舞台に立つ機会を提供することが、可能になってきました。

250回と言う回数に、どれだけ多くの声楽家の名前が絡んでいることか、そしてどれだけ多くの奏者とその卵たちが勉強して行ったことか、これこそ数え切れません。

### 【終わりに】

いつの間にか齢を重ねてしまった身としては、豊かな未来を期し、しかし不安に胸を締め付けられている若い声楽家や奏者たちに、その勉強の場を与えることが、今となっては私の大きな喜びとなりました。

## くらしき作陽大学における電子オルガンによるミュージカルの試み

赤松英彦(くらしき作陽大学)

くらしき作陽大学では、2002年ミュージカル専修第1回卒業公演以来、電子オルガンの伴奏によるミュージカル公演を継続的に行ってきた。今回は「電子オルガンによるミュージカルの試み」について、過去の舞台を振り返り、これまでの経験をもとに、ミュージカルにおける電子オルガンの係り方や可能性について考えてみたい。

### 1 〈2002年度ミュージカル専修卒業公演〉2002年2月5日

#### 倉敷芸文館 コーラスライン・ハイライト他

当初公演はカラオケ音源によって行われる予定であったが、本番1ヶ月前に急遽電子オルガンによるリアルタイム演奏が採用される運びとなった。準備期間が1ヶ月足らずと短く、リハーサルの時間も限られていたため、大学講師によるEL-900m1台での伴奏を行うことと決定した。我々教員にとってもミュージカルの伴奏は初めての経験であり、Keyの設定やリズム、Tempoの微妙な揺れ等、編曲と仕込みには予想を越える時間を費やす結果となった。大きな不安を抱えてのスタートではあったが、ミュージカル公演は好評のうちに終了し、地元メディアにも大きく取り上げられた。このことは、学内外の多くの聴衆に電子オルガンへの理解を深めてもらうための良い機会となったと感じている。

### 2 〈2004年度ミュージカル専修卒業公演〉2004年1月25日

#### 藤花楽堂 ミュージカルナンバーハイライト他

2004年度の公演では、電子音楽専修学生の編曲と演奏により、ミュージカルナンバーの伴奏を行った。ミュージカルの伴奏を務めることが学生にとっても大きな喜びとなり、教育的にも良い効果を生んだと感じている。リハーサル、本番といった経験が、学生の感性とやる気を高める絶好の機会となった。

### 3 〈2005年度ミュージカル専修卒業公演〉2006年1月29日

#### 藤花楽堂 ミュージカル「THE APPLE TREE PASSIONELA」

「PASSIONELA」の公演では、オーケストラと電子オルガン ELS-01C が音楽を担当した。ひとつのミュージカルをオーケストラと電子オルガンが数曲ずつ分担して演奏するという異例のスタイルでの公演となった。何より、生楽器と電子楽器とのサウンドの違和感やバランスを心配していたが、本番では電子オルガンがあたかも生オーケストラの如く鳴ってくれた。電子オルガンがオーケストラの代用として、十分に聞き応えのある音を出せるとの実感を得た。

### 4 〈2006年ミュージカル専修夏期公演〉2006年7月20日

#### 藤花楽堂 ミュージカルハイライト

学生のELS-01Cと大学講師のピアノがミュージカルナンバーの伴奏を務めた。減衰音のピアノと電子オルガンが交互に伴奏するスタイルであったが、ふたつの楽器のコントラストが想像を越える音の世界を生み出し、電子オルガンの音が、より新鮮に充実感を持って感じられた。

本学では電子オルガン1台プラス $\alpha$ でミュージカルの伴奏をする形態が定着しつつある。これは限られた条件下において、止むを得ず選択したスタイルでもあり、ベストな方法であるとは考えていない。電子オルガンによるミュージカルの伴奏では演奏形態以外にもアレンジのプロセスやPA、ステージング等まだまだ多くの問題を抱えているが、今後も電子オルガンの可能性を追求し、より豊かな響きを求めて公演に臨みたいと考えている。

## 電子オルガンによる新作ミュージカル ～2 台の電子オルガンを使うメリット～

西山淑子(昭和音楽大学)

近頃各地でさかんに行われている市民ミュージカルが、伊豆の伊東市でも行われた。『伊東ミュージカル劇団』による『青い目のサムライー伊東版ー』という、この地における史実に基づいたストーリーである。どこでも同じだと思うが、歌や踊りの未経験者も多く、年齢も4～5歳児から70歳代と幅広い。目的は、・3世代の交流、・故郷の歴史を語り継ぐ、・市の活性化につなげる、などが上げられる。

今回2回目の公演だったが、初回から演奏には2台の電子オルガンを用いている。それは、もっともコンパクトでありながら、音楽的にも充実する最小の編成と考えるからである。

また、作曲者が楽器を熟知している(自ら演奏する)おり、作曲する段階から電子オルガンの機能、音色などを踏まえて書いているので、スコアリーディング奏法や他の編成のアレンジと違い、演奏にも無理がなく弾き易いという利点もある。“電子オルガンによる”オリジナルミュージカルと言って良いだろう。

このミュージカルでは、様々なジャンルの音楽が混在している。クラシカルなアリア、童謡、わらべうた、民謡、歌舞伎の要素を取り入れた踊りのナンバー、ハバネラなどである。これら多岐にわたる音楽の楽器編成が電子オルガンではすべて対応できる。通常のオーケストラ+和楽器+ドラムセット+パーカッション+エレキベース・・・このような大編成では、現実には不可能である。それが2台で出来るのだから、電子オルガンはまさに、最適、最強の楽器と言える。

アコースティックな楽器の音色を踏まえながらも、アコースティックでは不可能な音の組み合わせや音域を使うことによって、また電子オルガンならではの音も活用することで、独自の音楽が生まれるのである。これはもはや代用楽器ではなく、電子オルガン音楽である。

1台ではなく、3台以上ではなく、2台というのが様々な面から最適なのである。1台ではどうがんばっても音楽的に欠如してしまう部分が出てくる。かといって、3台、4台となると充実した音を得られることは確かだが、いわゆる小回りが効かなくなってくることも明らかである。

近頃各地でさかんに行われている市民ミュージカルが、伊豆の伊東市でも行われた。『伊東ミュージカル劇団』による『青い目のサムライー伊東版ー』という、この地における史実に基づいたストーリーである。どこでも同じだと思うが、歌や踊りの未経験者も多く、年齢も4～5歳児から70歳代と幅広い。目的は、・3世代の交流、・故郷の歴史を語り継ぐ、・市の活性化につなげる、などが上げられる。

今回2回目の公演だったが、初回から演奏には2台の電子オルガンを用いている。それは、もっともコンパクトでありながら、音楽的にも充実する最小の編成と考えるからである。

また、作曲者が自ら演奏するので、作曲する段階から電子オルガンの機能、音色などを踏まえて書いているので、スコアリーディング奏法や他の編成のアレンジと違い、演奏にも無理がなく弾き易いという利点もある。“電子オルガンによる”オリジナルミュージカルと言って良いだろう。

このミュージカルでは、様々なジャンルの音楽が混在している。クラシカルなアリア、童謡、わらべうた、民謡、歌舞伎の要素を取り入れた踊りのナンバー、ハバネラなどである。これら多岐にわたる音楽の楽器編成が電子オルガンではすべて対応できる。通常のオーケストラ+和楽器+ドラムセット+パーカッション+エレキベース・・・このような大編成では、現実には不可能である。それが2台で出来るのだから、電子オルガンはまさに、最適、最強の楽器と言える。

アコースティックな楽器の音色を踏まえながらも、アコースティックでは不可能なおとの組み合わせや音域を使うことによって、また電子オルガンならではの音も活用することで、独自の音楽が生まれるのである。これはもはや代用楽器ではなく、電子オルガン音楽である。

1台ではなく、3台以上ではなく、2台というのが様々な面から最適なのである。1台ではどうがんばっても音楽的に欠如してしまう部分が出てくる。かといって、3台、4台となると充実した音を得られることは確かだが、いわゆる小回りが効かなくなってくることも明らかである。

ここでは、アマチュア団体のミュージカル上演に電子オルガンがいかにかに相応しい楽器であるか、そして、2台使うことの利点を事例とともに考察する。

## 2 台の電子オルガンによる「R. Strauss のオーケストラリート」

山咲史枝(国立音楽大学附属高等学校)

R. Strauss のオーケストラリートは没後 57 年を迎え、最近では日本でも「四つの最後の歌」などは徐々に紹介されているものの、オペラで言えば Verdi や Puccini のようなポピュラリティはまだまだ持ち得ない。私が最初に Op.68 の全 6 曲に取り組んだのは 20 数年まえ、大学院の修士論文のテーマとして「R. Strauss と G. Mahler と C. Brentano の作品的関連性」が初めてであった。その後 1991 年に Wien 留学から帰国、電子オルガン伴奏でオペラアリアやオーケストラリートのコンサートに出演を依頼された時に、新しい音への挑戦と融合が叶えば、と思い R. Strauss 歌曲で電子楽器とアンサンブルを始めた。当時の楽器は YAMAHA EL-90 であった。

それから 15 年、この度 9 月 8 日に府中の森芸術劇場ウィーンホールでリサイタルの依頼を受け考えたのは、前半を 18 世紀の楽器によるウィーン古典派歌曲、後半を 21 世紀の電子楽器によるウィーン近代歌曲、の対比である。

10 年以上電子楽器とのアンサンブルから遠ざかっていた私は、純粹に声楽家の立場で EL-90 からどれほどの進化を遂げたのか興味深かった。C. Brentano の変化に富んだドイツロマン詩を多少の効果音を混ぜたりしながら、聴き手に解りやすい演奏を作り上げる事で、電子オルガンがただのオーケストラ代理ではなく、全く新しいサウンドでドイツ近代詩を物語る伴奏ができる様に試みたかったのだ。

コンサート趣旨を奏者に伝えるにあたり、本番 5 ヶ月前に楽譜(オーケストラスコア、ピアノ伴奏譜、両方とも R. Strauss 自身が書いたもの)を手渡ししながら、オーケストラスコア通りでなくても結構。詩を理解された上でプレーヤーとしてのアイデアを存分に盛り込んでいただく様をお願いした。私は、特に効果音の挿入や、総譜には書いてないような楽器の音のアレンジ、電子楽器特有の弦楽器系統の不明瞭な音質の改善方法などを期待していた。また特に音響に優れたホールでの演奏、という条件もあってウィーンホールを良く知っておられるプレーヤーさんが選ばれたので、その方の裁量によるホールトーンの処理にも興味津々であった。

始めの段階では基本的な音作りを 2 人のプレーヤーにお任せしておいて、その後、私も混ぜての音作りが始まったのが 8 月初旬。本番まで 1 ヶ月という頃であった。

初めて身近で聴く 2 台のステージ ELS-01C の音。お二人の演奏を聴いたとき、一抹の不安が心をよぎった。自分の耳の記憶を辿ると 15 年前の EL-90 の方が様々な種類の音の中に、輝きというか、音の芯というか、があった気がしたからだ。でも、今のステージの中に他の音の可能性もあるかも知れないし、また多種の音を混ぜ合わせたりする事で理想に近い表現を生むことができるかもしれないと思い直して、2 回目からの稽古を進めた。ここで演奏する「C. Brentano の詩による 6 つの歌曲」Op.68 はどの曲もピアノで弾いても、オーケストラで弾いても、ウィーン風のテンポ感(ウイナーワルツの様な揺れもあり)常にテンポ、音量、音質が詩のテキストに沿って変化しなければならない難しさがある。Op.68 の 6 曲は、まさに詩の意味を裏の裏側まで理解し、歌い手とプレーヤーの 3 人の呼吸を感じ合って微妙な音楽の揺れを作り出さなければならない難しさと楽しさがある。詩の解釈というものは、正解がコレと決めてあるのではないから、「この言葉の裏側では何を言いたいのだろうか?」とか、「この単語の意味は、直訳通りに受け取って良いだろうか?」とか歌手とプレーヤーがディスカッションしながら、電子オルガンの音作りをできれば理想のリハーサルになるのであろう。1 ヶ月の稽古期間、素敵なディスカッションを求めて私はスタジオに通った。私の希望も多々述べては、プレーヤーさんたちを悩ませながら音を探し当てた。

稽古経過と本番での成果は、学会の発表で詳しく述べたいと思う。

## 電子オルガンのための作品について ～自作自演から見えてくるもの～

福地奈津子(日本音楽舞踊会議)

電子オルガンという楽器とつきあいはじめて、30年近くなるだろうか。日本音楽舞踊会議の主催する電子オルガン新作発表コンサート「Compositions」で1996年から2003年まで、6回自作自演をさせて頂いた体験から見えてきたものを私なりにまとめてみたいと思う。

### <1>自作自演のメリット

音楽作品の核や本質に迫る演奏をするには、演奏者が作曲者の意図を十分に汲み取るために作曲者との話し合いに多くの時間を割かねばならないことも多いだろう。しかし自作自演ではその過程は必要ない。また、電子オルガンの様々な機能にふりまわされ、作品が作者の意図を汲まない形で一人歩きしてしまうことが電子オルガンの作品には少なくない、と私としては思っているのだが、その危険性も自作自演ならば回避しやすい。

### <2>自作自演ゆえに見失ってしまうもの

しかし、自作自演が絶対的にすぐれているとは限らない。以前ラフマニノフやストラヴィンスキーの自作自演を聴いて、あまり面白いと感じられず、それが不思議だった。過去に二度、私の作品を演奏して頂ける機会に恵まれた時、本番の演奏では私が思いつかなかった音やパーカッションが鳴っていたが、違和感はなく、むしろ楽しく、そして嬉しい体験であった。自作自演の場合、自分で作った曲を弾くのだから、よく理解しているに決まっているというおごりがそれまでの私にはあったかもしれない。自分の作品を厳しく見つめ、深く掘り下げようという強い気持ちが欠けていたかもしれない。私は私の作品に対して無責任だったと思い知らされた。

### <3>自作自演が教えてくれたもの

作曲者としての責任と演奏者としての責任をひとりで負う自作自演は大変なことではあるが、この2つの責任をひとりでバランスよく負うことで自作自演におけるデメリットを解消することが出来る。そしてそのデメリットを乗り越えたことが「自作自演は作品を一番理解している者が演奏することで作品の完成度を高くする」という大きなメリットになるのだ。

### <4>電子オルガンのための作品制作のススメ

今年12月に行われる日本音楽舞踊会議の電子オルガン新作コンサート「Compositon2006」では、作曲者の先生方の作品を現役の学生や若い演奏家が初演する機会を設けたいという話を聞いた。大変素晴らしいことだと思った。電子オルガンという楽器はレジストデータを作るという作業からは絶対に逃げられない楽器だ。1つの音色の選択と判断は自分の演奏と作品への責任へと繋がっている。責任をきちんと感じている演奏者が本当の意味でのいい演奏ができるのだと私は信じている。そのことを経験した若者が、自らの作品を作り、演奏する意欲を持って欲しいと思う。

### <5>私自身への課題

電子オルガンが楽器として立ち立つためには、電子オルガンのための作品を多く作っていくことは確かに楽器のアイデンティティを促すことになると思う。しかし、その作品を演奏する電子オルガン奏者が素晴らしいことの方が重要なのではないだろうか。

今後の私自身への課題。電子オルガンをよく知る作曲者として電子オルガンのための作品をこの楽器の機能に振り回されることなく、責任を持って作っていこう。演奏者として、自分の選択と判断の上に作品が形づくられていることをきちんと認識しつつ、作品の本質により迫ることができるよう、責任をもって作品と向かい合おう。そして今後もたくさんの電子オルガンの作品が生まれ、たくさんの若くて素敵な電子オルガン奏者が生まれることを願って止まない。

「バベルの塔－電子オルガンのための」を作曲して  
～電子オルガンらしさとは～

三宅康弘(洗足学園音楽大学)

本発表は、電子オルガンのために作曲した自作品を分析することにより、「電子オルガンらしさ」について、作曲家から見た新たな視点を提示するものである。

この作品に含まれる新しい作曲アイデアは以下の5つ。

(1) コラージュの音楽

「楽器」から発想して曲を書くのではなく、この楽器で演奏される「音楽」から発想して曲を書いてみた。つまり、オーケストラなど他の楽器のための作品を編曲して模倣演奏することの多い電子オルガンのユニークな音楽状況を利用し、さまざまな時代(バロックから近代まで)の、さまざまな編成(ピアノからオーケストラまで)の曲を引用するコラージュの音楽(現代の作曲技法)で書く、というアイデアである。

(2) ポルタメント

同時に複数の音が扱える鍵盤楽器でありながら、電子オルガンほど自由にライブ演奏でポルタメント(高さの異なる2音間を非常になめらかに奏すること)をコントロールできる楽器はないと思う。音程の小さな振幅はビブラートとなり、音程の大きな振幅はポルタメントとなる。この曲では電子オルガンが多段鍵盤であることを活かし、ポルタメントを3種類の異なる方法でコントロールしている。

(3) スピーカー

電子オルガンは、楽器本体に内蔵されているスピーカー、もしくは会場が大きい場合には電子オルガン専用のラウドスピーカーを用いて拡声している。この曲では、原音を忠実に拡声するように設計されているラウドスピーカーから、メガフォンスピーカー(選挙など街頭演説に使う大型のタイプ)につなぎ替えることによって音を歪ませ、「リアル」なサウンドを、あたかも蓄音機でSPレコードを聴いているかのような音像に変形させている。

(4) 記譜法

電子オルガンで通常用いられている「3段譜」ではなく、オーケストラの譜面のような「多段譜」で書いてスコアリーディングする部分を設定してみた。奏者によって選び取られる音は違ってくるが、楽器のモデルチェンジを超えてレジストレーションを指示できる可能性を秘めている。これはクラシック音楽を演奏する電子オルガン奏者のほぼ全員がスコアリーディングできるという、電子オルガンならではの状況を活かしたアイデアである。

(5) 音域

電子オルガンは、レジストレーションで音高を処理し、「最適配置」(右手や左手を鍵盤の上に自然に置いた状態の、いわゆる弾きやすいポジション)で演奏しがちである。そこにその音がある必然性を持たせつつ、あえて「最適配置でない場所」にも音を置いてみた。

自由度の大きい楽器(電子オルガン)における自由度の大きい作曲法(現代作曲)は、あまりに多く得られる自由を持って余し、何をやっているのか分からなくなりがちである。そこでこの作品では「電子オルガンらしさ」を求めてさまざまな音楽的制約を課し、ある意味とても不自由な状態を自ら作り出すことによってやっと曲を書くことができたのだ。

さまざまな矛盾を抱えながら存在している電子オルガン。そのすべてを肯定できるような音楽を書くことも、現代に生きる作曲家の使命だと思う。

## 電子オルガンの歴史的考察(2) ～音と音楽と周囲との関わり～

金銅 英二(松本歯科大学大学院)

1934 年以来電子オルガンは、80 年近くの歴史を築き今日に至っている。その間の目覚しい技術革新で楽器やその演奏法も大きく変革してきた。特に 1970 年から 80 年代にかけて電子オルガンに導入されたデジタル技術による進化は急激かつ大きなものであった。デジタル音源によるリアルな音色、膨大なメモリーによる音色・演奏情報の制御、電子オルガンは 80 年前とは全く異なる楽器と言っても過言ではない目覚しい進化を遂げてきた。

反面、他のデジタルキーボード、デジタル音源との格差がなくなり、更には CD などの音源(や音楽再生装置)と比べると変わらぬ高品位な音質を電子オルガンが獲得したことによりクラシックからポピュラー、現代音楽まで幅広い音楽に対応し演奏の場が拡張するかのように思えたが、実際は本楽器で音楽を演奏する意義が曖昧になってきている感が否めない。言い換えると我々が電子オルガンで高品質なオーケストラ音源を駆使すればするほど電子オルガンの存在意義が曖昧になりはしないのか？社会での電子オルガンに対する認識はどうなのか？この点に関して今後詳細な分析をする必要があると考える。

今現在も小・中・高といった学校教育の現場から、各地の結婚式場から、公共のホールから電子オルガンが消えてゆきつつある。例え電子オルガンが備品として常設されていても使用頻度は激減しているのが現状ではなからうか？また海外、特にこれまで電子オルガン市場の中心であった欧米では一部様式の電子オルガンを除いて製造販売から撤退するメーカーが続出している。日本国内最大シェアを誇るヤマハエレクトーンのアメリカにおける販売も既に打ち切られている。このことから電子オルガン文化の継承は、今後日本を中心とした地域で堅実に担ってゆく必要性を感じる。電子オルガン文化継承の中心が日本でとなれば我々にとって電子オルガンの歴史的変遷を正確に把握することは非常に重要になると考えている。電子オルガンの歴史的な事象を検証せずして電子オルガンの拓かれた未来は築けないとも考える。

そこで今回、電子オルガンの音色の変化、演奏技術の変化に伴い演奏される音楽、演奏の会場、等どのような変化があったか？同時に社会との関わりはどう変化したのか？を考察する。また、1970 年代から 80 年代に電子オルガン以外の電子楽器や電子音楽器機(電子ピアノ、シンセサイザー、シングルキーボード、デスクトップミュージックなど)の存在が社会的地位を確立し、さらにこれらが電子オルガンの存在を希薄なものとしている。これらの要因についても考察したい。

最後に日本で電子オルガンが開発・発売された昭和 30 年～40 年代の音源も使用し、現状と比較検討してみたい。その音源から開発当初の技術力、演奏者の音楽性・演奏技術、そして電子オルガンの社会との関わりを解析することで現在の楽器の課題を見出し、今後の電子オルガンの未来に役立てたいと考える。

## マルチトラックアサインの実演及びその有用性について

小熊達弥(サウンド・インターフェース)

前年の日本電子キーボード学会でマルチトラックアサインの成果をコンピュータ、アプリケーション等を持ち込み発表を行い、それによる制作されたサンプルのCDをご披露させていただいた。

マルチトラックアサインとはエレクトーン演奏の上下ペダル鍵盤、リズム、アカンパニメントからの音声とMIDI情報をシーケンソフト上に分離記録しトラックごとの編集を行うものである。

今回の発表ではこのプロセスを発表会場において実演しその有用性を再度確認するものである。

人が音楽を聴く行為(音楽を聴く全時間)の中で90%以上の時間は録音物(CD、もしくはiPodを始めとするメモリーオーディオプレーヤのダウンロードファイル、以下音楽コンテンツとする)からのものである。そして其の結果が演奏者、作曲家、アーティスト、楽器の評価に成る。

其の観点から見るとエレクトーンは楽器としての完成度や歴史、演奏者の力量、ライブコンサートのインパクトに反し音楽コンテンツとしては質量ともに極めて不足感のあるものになって居る。

この原因は極めて多種多様な音色と機能を搭載し多声的な表現が可能であるものの発音はリズム、アカンパニメント唯一一人の人間の右手、左手、足からの発音によりそれが通信カラオケと同じく左右2ch. の電気信号でしか出力されないことに起因する。

ライブコンサートでは時間と空間が占有されてしまい比較試聴から逃れることが可能であるが音楽コンテンツの場合は日本どころか世界のなだたるメジャーサウンドをCDの交換、あるいは100万曲以上のiTuneファイルの中からチョイスすることが簡単にできる。そこには上記のエレクトーンの事情は一切通用しない。

CDあるいはiPodの中に存在する第一級の音楽コンテンツとは世界第一級のオーケストラ、ピアノコンチェルト、オペラ、ジャズ、ポップス、ロック、民族音楽、演歌等多様であるがまさしくほとんどのコンテンツが世界の第一級アーティスト、スタジオエンジニアによる多声的な(アコースティック楽器によるアンサンブルのレコーディング、アコースティックであるがレコーディング上でさらに何回も重ねたレコーディング、音源からコンピュータにストックしてMIXしていくもの、あるいはこれらを複合したもの等)レコーディングで成りたってる。1台の楽器でアルバムを埋め尽くすことのできる人はまれであり正真正銘其の分野のトップしか許されない。

今まさにエレクトーンは音楽コンテンツ上で勝負しなければならないがここまでの多数の音色と機能を持ち合わせていながらも1人1台演奏を1楽曲として無造作に左右2ch. の電気信号として音楽コンテンツにすることが上記を踏まえたと如何に無謀であるかがお解りであろう。

今回はエレクトーンの複数音源を同時に人間一人が演奏する場合の限界をプロ用シーケンソフト、プロツールズHD2上で実演し逆にマルチトラックアサインで完全に分離アサインされMIDIにコントロールされ発音するエレクトーン音源が世界の音楽コンテンツと対等に勝負し凌駕する様をご披露することになる。

## 電子オルガン音楽の社会認知に必要なこと ーコンサート活動を通しての可能性と課題ー

安井 正規(電子オルガン奏者)

様々な議論がなされている電子オルガンとその音楽について、それらがより社会に認知されていくためには何が必要なのだろうか。近年、電子オルガン奏者としてコンサート活動を通して得た現場における率直な声(外部評価)や自分の所感など具体例を紹介しながら考察してみたい。現在の電子楽器の音源部は、既存の楽器をサンプリングした PCM 方式によるものがほとんどであるが、特に電子オルガンの世界で議論されている利便性を追求した活用法ではない電子オルガンの価値とは何か。また、それらの価値が現代社会に活かされていくためには、どのような環境が整備されていく必要があるのだろうか。演奏者の立場から現時点での見解についても述べたい。

<事例報告>ー近年の主なコンサート活動からー

### 1. 電子楽器スーパーリサイタル 2006

(2006年1月14日 会場:名古屋市中川文化小劇場)

3台のオンドマルトノと最新電子オルガンのリサイタルの開催を通して愛好者や専門家だけでなくより多くの人々に電子楽器の魅力を伝えようと企画。財団法人名古屋市文化振興事業団芸術公演として認可され協賛者も募り開催。

### 2. Gifu リトミックの会ミュージカル公演「空のふしぎ」

(2006年3月19日 会場:大垣市スイピアセンター文化ホール)

ZERO キッズミュージカル「空のふしぎ」を Gifu リトミックの会がリトミックやボディパーカッションの諸要素を取り入れ脚色し、電子オルガンの有効性を活かした先進的なミュージカルとして注目を集めた。

### 3. アメリカマーチング世界大会「WGI」

(2006年4月21-22日 会場:アメリカナターセンター)

マーチング世界大会「WGI」(ウィンターガードインターナショナル)パーカッション部門ワールドクラス日本代表チームのゲストミュージシャンとして参加。アメリカには、日本製の最新電子オルガンがないため、日本から分解梱包し空輸。電子オルガンの表現力をアメリカでPR。

### 4. 名古屋市立神沢中学校家庭教育セミナー「音楽が育む豊かな心」

(2006年6月29日 会場:名古屋市立神沢中学校)

PTA 主催保護者を対象としたセミナーで、「音楽が育む豊かな心」と題し講師として講演と電子オルガンコンサートを開催。

### 5. 創作オペラ「裸の王様」

(2006年7月8日 会場:大垣市スイピアセンター文化ホール)

大垣市教育委員会主催 NPO 法人さくら歌劇団主幹によるオペラレクチャーコンサートとして開催。岡山廣幸氏の作曲による創作オペラを2台の電子オルガンで伴奏し指揮を担当。

## 電子オーケストラの使命 ～電子オルガンでオーケストラ作品を演奏する意味～

野口剛夫(JEO 音楽監督)

電子オルガンとは楽器なのだろうか。新しい楽器と言うからには、それなりのはっきりした特長がなければならぬが、電子オルガンにはそれがない。「個性のない個性」という宿命を背負い、楽器と言うよりは、コンピューターのような道具として考えるべきなのだろう。

こうした道具が、伝統的なオーケストラの作品演奏を手掛ける場合、どのような事態が起こるか。どんな音でも作り出せ、両手両足を駆使して、「1台でもオーケストラ」の鳴り物入りで登場した電子オルガンは、今、その可能性をもてあまし、八方ふさがりになっているのではないか。多様すぎる可能性、定点の定まらぬ取り組みが、実は夢をだいなしにし、エネルギーを減退させる。なんでもありの自由は本当の自由ではない。オーケストラ音楽を逆に矮小化させ、ひどいときには滅びに至らしめる。その危機的状態を、この楽器とそれに携わる人々は招こうとしていることに、そろそろ気づいてもよい時期だ。

過去から断絶したり、乱暴に飛躍するものは、後で手痛いしっぺ返しを食らうであろう。もともと何の伝統も持たない、楽器としての足場も持たない電子オルガンが、長く重い伝統に培われたオーケストラ音楽に関わる時、やってよいことだけでなく、やっていけないことがはっきりと浮かび上がってはこないだろうか。

かつて各国の無制限の二酸化炭素排出に対して、京都会議が排出削減を決めたように、電子オルガンの世界にも似たような取り決めが必要だと私は思うのである。私が設立したジャパン・エレクトロニック・オーケストラの理念と、演奏経緯を知っていただきながら、この深刻なテーマについて参加者と共に考えたい。

## 多様化時代と電子オルガン指導 ～ドリマトーン、アトリエ、エレクトーン共存の試み～

前田栄子(昭和音楽大学)

近年の電子技術の発達に伴い、電子オルガンやシンセサイザーはその性能も音色も、10数年前とは比較にならない程、飛躍的に向上した。各メーカーは、それぞれに特色のある音色や操作性を持ち、その違いが非常に味深い。しかし、従来電子オルガンの演奏者もしくは生徒のほとんどは、同一メーカーの電子オルガンのみを使用し、他社の機種には触れる機会も少なく、まして同じステージ上に各メーカーの電子オルガンが揃う機会はほとんどないに等しいと考えられる。

そもそも電子オルガンは、1台でリズム、メロディ、ハーモニーを奏でられるという特性から、ソロ演奏が主流であるため、アンサンブルをする機会は比較的少ない。軽量のシンセサイザーやキーボード類に比べ、本体の重量があり移動が困難であるため、頻繁に持ち出して演奏することは容易ではなく、演奏の場が限定されている。しかし、前にも述べたように他社メーカーの機種の優れた操作性やクオリティの高い音色などは興味深く、更にそれを身近に感じる事が可能であれば大変有意義であろう。

1970～80年代をピークに電子オルガン人口が減少した。現在も「実際に電子オルガンを見た事がない」との声を聞くことが頻繁にある。その為、電子オルガン専攻の生徒達から提案が出され、一般大衆の認識を高める目的のみならず、更にアンサンブルをする事多様性を引き出し、『電子オルガン』を大衆に向けて発信していきたいと考え、12年程前からコンサートを企画、開催を始めた。

第一回目は、私自身がカワイ音楽教室に講師であったため、ドリマトーン1台、Drums、Saxの形式をとった。それまで電子オルガン+αの経験がない生徒にとってセッションは強い衝撃であった印象が思い出される。出演者、聴衆両者から好評を得られ、毎年恒例コンサートとなった。数年後にカワイを退職し、ステージ上にエレクトーン(ヤマハ)を加え、特にエレクトーンで演奏されたオーケストラ曲はその音色のリアルさに聴衆は驚愕したことであろう。また2社の機種を使用したアンサンブルが演奏された事によりコンサートは華やかさを増した。ミュージックアトリエ(ローランド)が発売され話題を呼び、出演メンバーの一人が購入したことから現在では3社の電子オルガンを使用できる大変恵まれた環境にある。

ここで簡単ではあるがそれぞれの演奏、及び機種を比較してみる。

1. ドリマトーン(カワイ)／サンプリング音をもとに、演奏者の独自のサウンド作りを目指している。スコアリーディングによるオーケストラ作品なども予想外な電子サウンドに仕上げ、オリジナリティに富んでいる。
2. エレクトーン(ヤマハ)／サンプリング音を最大限に生かし、バランスの良いオーケストラサウンドを再現することができる。最新機種のステージアではポピュラー系の音色も充実しセカンドエクスプレッションペダルを使用することにより演奏により微妙なニュアンスがつけられる。本体を分解し、自家用車での持ち運びが可能。
3. ミュージックアトリエ／リアルタイム演奏のための配慮が随所に息づき、特にシアターオルガン、ジャズ(ローランド)オルガン、ロックオルガンなどのいわゆるオルガンサウンドは深みがある76鍵の下鍵盤とダンパーペダルはピアノ演奏の表現力をそのまま生かせるので演奏者にとって違和感が無い。

このような3社の特色を生かし、電子オルガンのみのアンサンブル、電子オルガン+α、ソロ演奏をなるべく様々なジャンルから選曲したプログラムで構成している。

電子オルガンはどのようなジャンルも演奏できうるある意味特種な楽器である。広い音楽性と知識と経験が電子オルガンの魅力を倍増させ、企業の枠を超え、更に飛躍できることを期待し、今後もコンサートを継続していきたいと考えている。

芸術創造の立場から見た電子オルガンの将来性  
Possibilities of the electronic organ in music art creation

中島 洋一(国立音楽大学)

私は 1998 年7月 28 日に、渋谷エレクトーンシティで行われたワークショップにおいて『エレクトーンにおけるオリジナル音色作成の可能性を広げる方法についての提案』というタイトルで発表を行っている。それから8年を経た現在と当時を比べるとデジタル・テクノロジーの世界は格段に進歩しているが、電子オルガンを取り巻く状況に大きな変化は見られないし、当時からあった課題が達成されているとは言い難く、私が提案し要望した『オリジナル音色作成の可能性拡大』も殆ど実現していない。

エレクトーンは、己が持つ、コンピュータ、楽器という二つの性格の間で、己のあるべき姿を探しあぐねているかのように見えるが、そのような傾向は他の電子オルガンにも多かれ少なかれ当て嵌まるのではなかろうか。私は前者が持つ多様性、多機能性と、後者、つまりリアルタイム演奏楽器が持つ微妙な表現力を併せ持つ方向に進むことこそ、電子楽器エレクトーンがその優位性を確保し、音楽芸術創造に貢献して行く道と考え、①オリジナル音色作成機能の拡大、②より微妙な演奏表現力の獲得、の二面から、その可能性について提案したいと考えている。

①オリジナル音色作成機能の拡大

現在のエレクトーンは、AWM 音源を主として構成されている。その他最新の製品では VA 音源を併せて搭載し、過去には FM 音源も搭載された。AWM 音源は PCM 音源であり、ユーザーが作成した波形データを取り込むようにすることで、音色の可能性を無限に拡大出来る。しかし現在のエレクトーンは搭載された波形データの組み合わせを変えたり、エフェクトのかけ方を変えたりすることで、ボイスを編集するやり方をとっており、波形データそのものを自由に取り込むことが出来ない。10年以上前に YAMAHA で製造され、エレクトーンと同じ AWM2 音源を搭載した TG-500 は波形データ自体をとり込めるようになっていた。メモリー環境などが格段に向上した現在において、もしそのような機能をエレクトーンに取り込んだ場合、どれほどの表現力の拡大が期待できるか、音の実例をあげて検討する。

②より微妙な演奏表現力の獲得

エレクトーンは以前に比べ音質面においては向上して来ているが、演奏機能の面でいくつかの問題点を残す。ダイナミクスの変化については、キータッチ、ペダルの使用により、かなり満足出来るレベルまで達しているが、音色を時間変化させる機能などに課題が残るほか、ピッチを幅広い音域にわたりなめらかに変化させるグリッサンド機能なども十分とはいえない。そういう点では最初期の電子楽器であるオンド・マルトノの方が数段優れている。

エレクトーンの演奏表現力が制限されてしまう理由の一つに、MIDI 制御の採用があると推測する。MIDI にはデータフォーマットの仕組みからくる制御段階が 128 段階にとどまるという問題もある。MIDI 規格に適合させることは、他の電子楽器との連携を考慮に入れると不可欠であるが、必要に応じて特定の機能について MIDI 制御をオフにし、独自の制御法をとることが出来ないか。MIDI 非対応の電子楽器であるオンド・マルトノと比較しながら検討する。

## 音楽教育と電子キーボードの音色について

初山 正博(世田谷区立明正小学校教諭)

### 1. 器楽教育における電子キーボードの有用性

音楽科教育における「合奏」の活動は、さまざまな楽器を用いて、児童一人一人の個性に合った楽器を選択しつつ、音楽の深まりを全員で追及することができるので、音楽の基礎力を育てながら、教育の今日的課題である『自己肯定感を育てる』と『人と積極的に関わろうとする力を育てる』の2点について、「音楽の深まりの追及による価値の共有」という面からのアプローチにより大きな効果をもつと考えられる

しかし、小学校における器楽合奏は、

- ①使用楽器の音域がソプラノとアルトに集中し、響きに安定感がない。
- ②響きの厚みと音色の多彩さが乏しい。
- ③アコーディオンは児童にとって演奏技能の習得に負担が大きい。

などの問題をかかえている。

テナー・バス音域の充実と音色の多様さを解決するためには、クラブ活動として小学校に多く導入されている管楽器を用いることもできるが、小学生の管楽器の演奏は音色・ピッチともにきわめて不安定であり、音楽の深まりを追求することは難しい。

対して、シンセサイザーなどの電子キーボードを活用すると、低学年からの鍵盤の学習の発展として誰でもが担当できるうえに、安定したピッチと音色により前記の問題を全て解決することができる。

### 2. 器楽合奏における電子キーボードの問題点

しかし、器楽合奏で電子キーボードを有効に活用するためには音色という大きな問題をクリアしなければならない。器楽合奏の中心になる楽器はソプラノリコーダーか、鍵盤ハーモニカやアコーディオンのリード楽器である。合奏の響きの厚みをつけるためには弦楽器の音色を加えるのが、まず、有効であるが、このときサンプリングされた生の音に近い音色では音が浮き上がってしまい音のまとまりが作れない。ソプラノリコーダーやリード楽器と溶け合う弦楽器の音色が必要である。具体的にはボーイングノイズを抑えるとともにリードの音色を加えた「太い」弦の音が必要である。このような弦楽器の音色をサンプリング音色が中心となっている今のシンセサイザーのプリセット音から選択することは困難な場合が多い。金管系の音色についても同様の問題がある。

また、合奏を支えるバスの音色も、コントラバスやチューバなどの具体音では雑多な音色の集合体である器楽合奏の土台にはなれない。音色名を特定できない「太い」音が必要である。

このように考えていくと教育用に音色を創った電子キーボードが必要なのであるが、いくつかのバス専用オルガンを除いては器楽合奏用の電子キーボードは作られていない。発表ではいろいろなジャンルや編成に合った電子キーボードの音色について、具体例を挙げながら考察していきたい。

奏者の身体性を反映した電子オルガンアレンジ  
～若い奏者の息遣いをかき消さないために～

森松慶子(音楽ライター)

電子オルガンが演奏される場面に居合わせるたびに、筆者は楽器から出てくる音響が奏者の演奏の“身の丈”に合ったものか否かが気になってしょうがない。“身の丈”に合った音響ならば、奏者がまさに、今ここで演奏しているのだという臨場感が伝わり、演奏の巧拙とは別の次元で心を打たれる。その一方学習者クラスの人々の演奏でよくあることだが、奏者の“身の丈”を超えた音響が鳴り響いていると、その音響が豪華であればあるほど、ある種の痛々しさや空しさを感じる。

筆者はこれまで一貫して電子オルガンという楽器を演奏する際の身体性を研究課題の中心としてきた。先に本学会の第一号論文集に掲載していただいた論文では、科学技術と身体性のかかわりを論じた一節で音楽教室で電子オルガンを学ぶ子ども達に触れ、電子オルガンの音色作りや演奏補助機能の使い方によっては、音響と奏者の身体性が遊離して演奏のリアリティが薄れてしまう危険性があることを指摘した。本年の発表では、その点をさらに具体的に論じたい。

表題のような問題はかねてから筆者も意識していたが、本年この問題を特に取り上げたいと考えたのは、昨年経験した以下の事柄をきっかけに、この種の課題に少しでも早く自分なりに取り組み、同時に多くの方のお知恵もお借りしたいと考えたからである。

ある音楽教室の5～6歳児のクラスで、子ども達が自作曲をめいめい作って発表することになった。グループレッスンの中で毎週少しずつそれぞれのモチーフを発展させては先生の前で弾いて、次に書き進めるヒントなどをもらっていた。ある日のレッスンで、ひとりの女の子が曲の半ばで伴奏に突然アルベルティ・バスのような音型を実に生き生きと挿入した。周りにいた仲間達も付き添いの母親達も、その鮮やかな印象に皆思わず感嘆の声を上げた。演奏の内容自体はそんなに高度なことではなかったかもしれない。しかし、その小さな女の子が、自分の思いついた最高のものを思い切ってその場で披露したときに発散したきらめきや勢いが、その瞬間その場にいた皆に、確かに伝わっていた。

数週間後、少し大きな会場でそれぞれの自作曲を発表した。しかしアルベルティ・バスの女の子の曲は、熱心な先生が一生懸命手を入れた結果、オートリズムや補助演奏等で本人の演奏していない音がいろいろと組み込まれ、どの音が本人の弾いている音なのかも殆どわからなくなっていた。筆者は結局、レッスンの時に皆が感動した部分がどこだったのか、見つけだすことができず、他人事ながら何か残念ではなかった。この場合、先生はその子の曲をより華やかに鳴らしてあげよう、その子の演奏をより引き立ててあげよう、という善意で工夫を凝らしていたわけだが、できあがりの音響が豪華であることと、演奏の説得力とはまた別だ、というところが難しい。音響の豪華さと聴衆の感動は、必ずしも比例しないのだ。

若い子どもの場合、奏者としての息づかいはまだ微かで、よほど注意深く聴かないとわからないことも少なくない。そうした密やかな息づかいを丁寧にすくい取り、聴く者皆で大切に分かち合うことも重要だろう。一概に「このようなアレンジが適切である」等とは決めつけられないが、ある程度の目安となるような事柄をなるべく具体的な形で提示できれば幸いである。

## 電子キーボード・デモンストレーション

### “マルチメディア芸術素材としてのキーボード演奏について” ～ キーボード演奏と電子技術の新たな関係性の模索 ～

今井慎太郎(国立音楽大学)

電子技術とキーボード演奏の組み合わせといえば、電子音響発生機器をキーボードによって、いわばスイッチ的に制御するというかたちが一般的です。またそれは本学会の名称にもある「電子キーボード」という言葉から普通に想起され、伝統的な鍵盤楽器の正統な発展形として広く世に膾炙するものでしょう。しかしながら、電子技術とキーボード演奏による芸術表現には、これ以外のかたちはあり得ないのでしょうか。

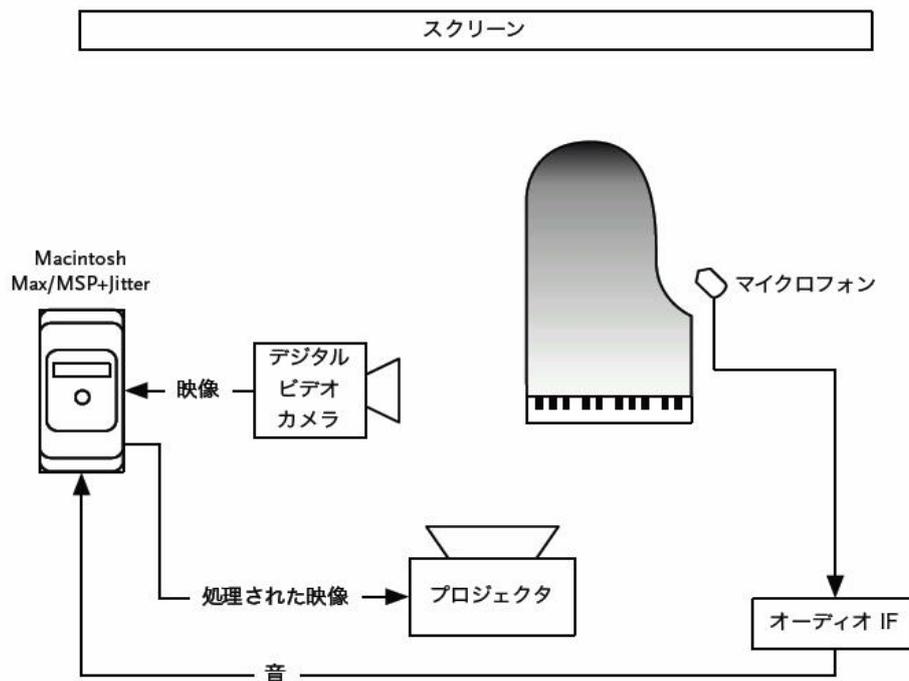
こうした問いのもと、本デモンストレーションでは「電子キーボード」の「電子」と「キーボード」をいったん分離して考えてみます。なおかつ音楽からもひとまず離れてしまい、その上で、キーボード演奏の別の魅力的な側面である、奏者の手の視覚的な動きに着目します。

演奏における手や指の動きをデジタル・ビデオカメラでコンピュータに取り込み、各種の技術を用いてリアルタイム映像信号処理を施すことによって、さまざまな視覚表現を実験してゆきます。さらに、そこへ音高や音量といった演奏音からの情報を介在させることで音と映像を関係付け、マルチメディア芸術の素材とすることを試みます。電子技術とキーボード演奏の、映像を介して結びつけられる新たな可能性を模索します。

1. キーボード演奏を「観る」
2. 手や指の動きと映像信号処理による視覚表現
3. カメラアングルによるバリエーション
4. 演奏音情報を介在させたインタラクション

デモンストレーションにおいては、通常の「電子キーボード」との差異を際立たせるべく、演奏にはピアノを用います。また、映像信号処理のためのシステムは、Macintosh コンピュータと Max/MSP+Jitter ソフトウェアにより構築されています。

システム図



ピアノ演奏：藤村治子(国立音楽大学音楽文化デザイン学科)

